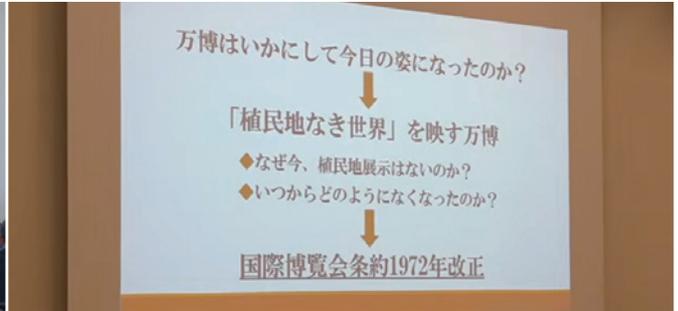


News Letter

Graduate School of Education



シンポジウム「万博学／Expo-logy」～「万国博覧会の戦後世界史」に向けて～(万博学研究会主催・於 グランフロント大阪ナレッジキャピタル)

巻頭言

2

齊藤 智 研究科長

名誉教授から

3

楠見 孝 名誉教授
高橋 靖恵 名誉教授

研究ノート

4

[教員から] パク ジュナ 教育認知心理学講座 講師
[院生から] 田中 明子 修士課程1回生
[社会人院生から] 吉川 大樹 修士課程2回生
[留学生から] 王 思遥 修士課程2回生

活動報告

6

[附属臨床教育実践研究センターから]
松下 姫歌 附属臨床教育実践研究センター長
[教育実践コラボレーション・センターから]
西岡 加名恵 教育実践コラボレーション・センター長
[グローバル教育展開オフィスから]
南部 広孝 グローバル教育展開オフィス長

事務室から

7

八代 幸造 総務掛長

トピックス

8

藤間 公太 教育社会学講座 准教授

若手研究者出版助成事業

9

諸記録

10

- ・主な出来事 (2024.11.1 ~ 2025.3.31)
- ・教員寄贈図書リスト 2024 (令和6) 年度
- ・入試結果 2025 (令和7) 年度
- ・学位授与件数 2024 (令和6) 年度
- ・教育職員免許状取得状況 2024 (令和6) 年度
- ・外部資金受入れ (2024.10.1 ~ 2025.3.31)
- ・科学研究費補助金 2025 (令和7) 年度
- ・人事異動 (2024.11.1 ~ 2025.4.30)

諸報

15

- ・新任教員・事務職員紹介

教育学研究科・教育学部基金

16



京都大学 大学院教育学研究科ロゴマーク

このロゴマークは、京都大学学術情報メディアセンターの元客員教授・奥村昭夫先生のデザインです。奥村先生は、ロート製菓、グリコ、牛乳石鹸などのロゴマークやパッケージなどを手がけた著名グラフィックデザイナーです。本研究科・学部の「育ち」「つながり」「先端」といったキーコンセプトをもとに、教育学部本館の正面玄関を見守るクスノキの葉をモチーフとし、緑のグラデーションで成長の変化、中央の空間でこれから生まれてくるものを表わし、全体として両手で優しく包み込むイメージのデザインとなっています。

大学院生前橋(仮名)「研究科長、新年度が始まってからもう1ヶ月以上が経ちました。今年度はどのようなことを目標に教育学研究科の運営を行われるのですか。」

研究科長「そうですね、今年度に限った目標というわけではありませんが、研究科に所属している教員やその他の研究者がそれぞれの力を発揮して、思う存分研究に打ち込める、そんな運営をしたいとずっと考えてきています。簡単ではありませんし、うまくいっているとはお世辞にも言えません。教員に関して言えば、研究以外の仕事が多すぎますから。1つ補足しますと、大学院生も研究者です。皆さんは研究者の卵ではありません。大学院生は立派な研究者ですよ。」

前橋「このことは、大学院の新入生ガイダンスでおっしゃっておられましたね。確かに、大学院生になったら学会発表をしたり、学外で研究活動を行ったりします。大学の外から見たら、私は京都大学の一員で、その立場で研究活動をしているわけですから、一人前の研究者として扱われるのだと思います。研究倫理も含め、研究者としての責任を十分に自覚して研究に臨みたいと思います。」

研究科長「そうしてください。でも、一番大切なことは、自分の興味や関心を大切に、やりたい研究に集中することです。その研究に向かう中で、研究倫理を含む研究法の習得は必要になってくるわけで、まずは挑むべき研究が先にあるのだと思います。」

前橋「研究科として今注力している研究プロジェクトにはどのようなものがあるのですか。」

研究科長「それぞれの研究者が独自にプロジェクトを動かしていて、どれもこれも魅力的で、研究科としては応援しているのですが、特に昨年度から開始されたSMBC京大スタジオとの共同研究は、規模も比較的大きく、社会的に重要な課題に挑んでいますので、中心的なプロジェクトであると言えると思います。」

前橋「どのようなテーマなのですか。」

研究科長「『貧困・格差・虐待の連鎖を乗り越える教育アプローチの研究開発と普及』というテーマで、副研究科長の西岡教授がSMBC京大スタジオや日本総研の方々と一緒に研究グループをまとめてくださっています。」

前橋「とても重たい課題ですね。」

研究科長「はい。そのため、研究科の多くの教員に関わってもらって、総力戦で頑張っています。ただし、このプロジェクトの特徴は、課題が重いというだけではないんです。ここ

に『教育アプローチ』を謳っていることが重要ですね。未来の社会を変えていくためには、どのような活動であっても教育を抜きにしては考えることはできません。私はこの後五十年も生きていくことはないと思います。私が去った後の時代を作るのは今の子どもたちや若い世代の人たちです。次世代、そしてその次の世代の人たちがどのような社会を生きるのか、それは今の子どもたちがどのような教育を受けるのかにかかっているといっても過言ではないでしょう。こんなことは当たり前のことなので、研究科の教員は誰もわざわざ言わないのですが、教育学は国や世界の未来を変えることのできる学問なのです。」

前橋「そうかもしれません。でも、未来を理想通りに変えることは簡単にはできないのではないのでしょうか。例えば、Charles Darwinはビーグル号航海記の中で次のように貧困の問題に触れています。"..... if the misery of our poor be caused not by the laws of nature, but by our institutions, great is our sin (Darwin, 1839, p.249)." 貧困の問題は、社会の仕組みによって引き起こされている側面があり、多くの人々が努力してきたのにもかかわらず、二百年近く経っても解決できていません。これを教育学で変えることができるのでしょうか。」

研究科長「教育学の力だけでは難しいと思います。教育学の強みは、ありとあらゆる学問と繋がっているところにありますし、そうした繋がりを支える学術的・社会的状況は百年前とは全く異なります。教育学は、他分野の様々な人々と連携することで、未来を変える力を発揮できるのだと思います。」

前橋「私も教育学の力を信じてみようと思います。ありがとうございました。」

Darwin, C. (1839). *The voyage of the beagle*. Independently published (ISBN-13: 978-1660289875)



Photo by Handja of unsplash

名誉教授から

これまでの感謝と新たなミッション

楠見 孝

このたび3月末に教育学研究科を定年退職し、4月から国際高等教育院・特定教授および副教育院長を務めています。研究科には1999年10月に着任し、24年半にわたり職務を全うできたのは、皆様のご厚情の賜物と、心より御礼申し上げます。

とくに2020年からの3年間、研究科長・学部長を務めた際には、新型コロナの感染拡大と重なり、先生方や職員の皆様には教務、学生支援、図書、入試関連業務など前例のない課題に対応いただき、深く感謝申し上げます。私としては3年間精一杯務めました。至らなかった点はお許しいただければと思います。

教育面では、優れた学生に恵まれ、その成長を見守ることができました。研究面では、教育認知心理学の視点から、高校などでの批判的思考力育成の実践研究に取り組み、フィンランドやブータン（右下写真）、中国などでの教育調査にも参加し、研究の視野を広げる機会となりました。さらに、高校公民科「倫理」への心理学の内容の導入に際して、教科書執筆にも携わることができました。

現在、私は全学の教養・共通科目の授業および教育改革に取り組んでいます。研究科教員には、全学の教養・共通教育は距離のあることがらと見なされがちです。しかし、学部4年間の教育において総合大学の強みを活かして学生を育てるに

は、研究科教員の積極的関与が必要と考えます。

今年度からは初年次教育改革の一環として、毎週1コマの講義と少人数演習を組合わせた4単位の統合型複合科目が4つ新設されました。私はその一つ「大学で学ぶ」のコーディネータとして、講義で批判的思考とアカデミック・リテラシーの概説を行い、演習において、複数部局の教員と連携した協働学習を通じて、自ら問いを立て、調べ、考え、書き、発表し、議論する力を育成しています。今後こうした科目の充実が、初年次教育の重要な課題と考えています。

最後に、教育学研究科と皆様の一層の発展を心より祈念するとともに、今後ともよろしく申し上げます。



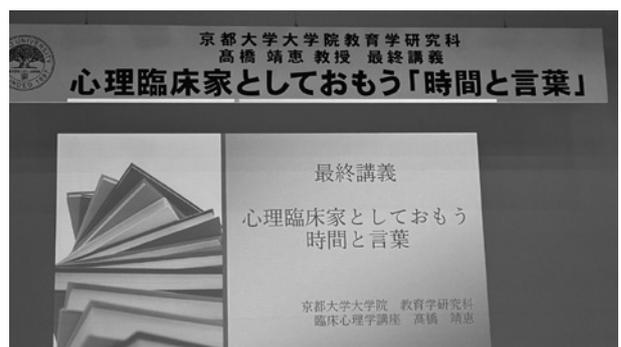
実践と研究指導における相互性 –感謝を込めて– 高橋 靖恵

2009年4月以来、16年間大変お世話になりました。臨床心理学講座の高橋靖恵です。私は名古屋大学大学院教育学研究科にて学び、その後愛知淑徳短期大学、九州大学での教員経験を経て、本学教育学研究科に着任しました。長年臨床実践について学び、教育に関わってきましたが、本研究科では、加えて、臨床実践指導者養成コース（着任時、臨床実践指導学講座）にて臨床心理士の指導者養成にも携わってきました。これは、心理臨床家としての私の人生において、かけがえないものです。着任当時、臨床心理学の3コースは臨床教育学専攻に属し、臨床心理学教室の先生方はもちろんのこと、教育認知心理学コースの先生方、臨床教育学をはじめ教育学研究科の先生方との幅広い学術的交流、教育的協働の中で生き生きと教育・研究活動に従事できました。

現在も私は心理臨床実践に関わるカンファレンスや個人指導（スーパーヴィジョン）・セミナーなどでの教育、そして心理臨床活動に従事しています。今、定例業務ではなくなったことであらためて思うのは、「研究指導で得られた学び」です。心理臨床実践でのスーパーヴィジョンにおいて、スーパーヴァイザーの学びを重ねることやスーパーヴァイザーとの学びの相互性は常々伝えていきます。さらにそれは、博士学位論文のためのゼミや個人指導において、指導者でありながらも、新たな知見

や発想を見聞き、討論を重ねることで、自らの実践研究の展開に繋がるということです。これまで、国立大学での大学院博士後期課程の指導に携わって依頼、主査として20名ほどの博士を送り出し、副査も含めると、その2倍以上になります。これは、私ひとりでは考えられない新たな発見を見出す歩みに同行できた喜びです。ここで生まれた「相互性」が、彼らの指導者としての在り様にも継承されることを願っています。

あらためて、教育学研究科の先生方、そして小規模の研究科であるからこそ、事務の皆様との常々の温かい交流とご支援にこころから深謝申し上げ、ますますのご発展を祈念いたします。



教員から

文化を映す心理的経験とウェルビーイングの探究



教育認知心理学講座・
グローバル教育展開オフィス 講師
パク ジュナ

私は文化心理学と社会心理学の視点から、人間の認知や感情、行動が文化的文脈にどのように影響を受けるかを探究しています。文化的・社会的規範や個人が置かれた状況によって左右される人々の知覚に着目し、さまざまな社会的・環境的現象に対する知覚と、それがウェルビーイングや適応に及ぼす影響を明らかにすることを目指しています。

幸福感に関する研究では、ウェルビーイングの多様な側面に焦点を当て、文化や個人の価値観、社会の発展段階がそれらの体験にどのように関わるかを検討しています。特に、充実的側面(ユーダイモニック・ウェルビーイング)は、肯定的な感情経験に基づくハピネスと比べて、より持続的で将来の主観的幸福感を強く予測する一方で、個人や文化の価値体系により大きく影響されることが示されています。

さらに、気候変動が人々の精神的健康やウェルビーイングに及ぼす影響についても研究を進めています。環境意識や自然とのつながり感覚が、気候変動への不安やストレスへの心理的適応に果たす役割を検討しています。また、異文化間移動や国際化社会における異文化適応プロセスにも関心を持ち、適応が自己概念や社会的関係性に及ぼす影響を文化間比較の視点から明らかにしようとしています。

これらに加えて、青少年の自尊心(self-esteem)尺度の検討や、文化における子育てスタイル、社会発展とウェルビーイングの関連、自己概念のあり方などに関する共同研究も行っています。

これらの研究を通じて、私は「普遍性」と「文化的特殊性」は相反するものではなく、相互に照らし合う存在であると実感しています。文化に根ざした心理的プロセスを可視化することによって、人間理解はより立体的かつ深みのあるものになると信じています。今後も、動的に変化する世界において、人々の世界観や心理的経験に着目しながら、ウェルビーイングと適応のあり方を探究し続けていきたいと考えています。

院生から

移ろう世界の中で、変わらぬものを想う



臨床心理学講座
修士課程1回生
田中 明子

私は時に、過ぎていく時間の持つ圧倒的な力にはっとすることがある。日々を何気なく過ごしていると忘れてしまいそうになるけれど、どんな瞬間もとこぼすことなく時は刻まれ続けている。その中で当たり前に変化していく自分を目の当たりにすると、時の流れにあらがいたい気持ちになる。「変わっていくこと」は、何かを失ってしまう予感と共にある気がする。一方で、ずっと変わらないものも

ある。私にとってそれは、家族5人で囲むあたたかな食卓の風景にはじまり、何年たっても色あせない数々の思い出や、ささいなことでは揺らがない周囲の人々とのつながりの中にある。

「変わらないもの」への信頼があるからこそ、私は不確かな毎日をしっかりと踏みしめながら生きていくことができるのだと

思う。そんな幸せを、ふと実感する。

他方で、「変わらず確かにあるもの」を持たない人々もいる。そのような人々は、無慈悲な時間の流れがもたらす変化への恐怖や、先行きの見えない将来への不安をよりダイレクトに感じるかもしれない。私は、彼らが助けを求めてきたときに、時が経っても変わらず共にあり続ける何かを伝えることのできる存在でありたい。そのためにも、つながりや思い出の中にある「変わらないもの」がどのように形作られ、支えとなるのか、そのような支えをもとに自分の力で人生を切り開いていくとはどういうことなのか、について理解を深めていければと考えている。私の専攻である「臨床心理学」においては、人々の抱えるこころの問題を実践や研究によって探求する営みの中で、自分や他者の内面に触れ、ふさわしいこころの表現を探していくことが求められる。大学院での生活は、まだまだ慣れないことばかりだが、忙しい日々の中でも自分を見失うことなく、いつでも変わらず私を見守り、支え続けてくれているものへの気づきと感謝を忘れず、人生や社会への深い洞察力を磨きながら過ごしていきたい。

社会人院生から

『教育者』としての大学職員であるために



教育学環専攻高等教育学コース
修士課程2回生
吉川 大樹

みなさんは「大学職員」と聞いてどのような人を思い浮かべますか？履修関係の書類を受け取る人・奨学金の申請を受け付けている人・提出物の督促のメールを送ってくる人…、おそらくそのような場面に関わった人を思い浮かべる方が多いのではないのでしょうか。もちろんこれらの方々も職員ですが、総務・人事・経理・企画といった、普段学生さんや保護者の方と直接関わることのない仕事をしている人もたくさんいます。

これらの仕事は一見教育学と無関係のように思うかもしれませんが、大学という教育機関をうまく機能させるためには、事務組織も重要な要素の一つであり、その組織のあり方について考えることも教育学の一つであると私は考えています。自身の研究では、「教職協働」（大学の教員と職員が互いに協力して大学運営をしていきましょう、というスローガンとされる言葉）を

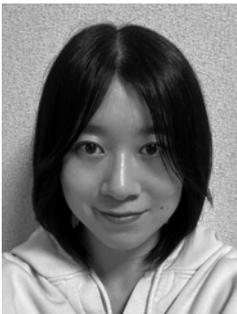
手がかりに、大学組織のあり方を検討しています。

私は大学職員として15年近く勤めてきて、昨年から勤務先大学の休職制度を利用して本研究科に入学しました。教育学についてはほぼ初学者でしたが、高等教育学コースの先生方や院生のみなさんから学ばせていただきながら、楽しく勉強しています。特に、指導教員の松下佳代先生のゼミでは、松下先生の研究テーマの一つである汎用的・分野横断的能力についての議論が行われており、大学でどのような教育が必要であるか理解を深めることができています。また、他大学で活躍されている教職員などの高等教育関係者の方々やゼミや学会を通じて交流を持つことができたことや、大学職員の経験を経た上であらためて学生の立場を経験できていることなど、現場に戻った後に生きる経験ができていると感じています。

私が新人の頃、勤務先大学のある先生から、「大学職員も『教育者』の一人として仕事に取り組んでほしい」という言葉をいただいたことが、私の職員としての指針となっています。修士号の取得後は職員として現場に戻り、大学教育や学生に対する理解をより深めた『教育者』として、より良い教育や学習環境を生み出す大学組織を作っていきたいと思っています。

留学生から

「腐女子」の社会学を学ぶ



教育社会学講座
修士課程2回生
王思遥

「腐女子」という言葉は日本発祥で、1980年代中頃から1990年代初頭にかけて、反戦・解放・個性の尊重といった時代背景のもと、多くのBL作品が登場し、腐女子文化が興隆しました。その後、この文化は中国にも流入し、2010年頃からは中国の「80後」や「90後」と呼ばれる世代の女性の間で急速に広まり、近年では「腐女子」という言葉も中国社会に広く知られるようになってきました。

私が腐女子について研究しようと思ったきっかけは、中国のSNSで偶然目にした、男性同士の恋愛を描いた二次創作作品でした。絵柄はもちろんのこと、そのストーリーに心を打たれ、「なんて素晴らしい物語なんだ」と感動し、私は自然と腐女子の一員になっていました。そして次第に、「なぜ腐女子たちは男女の恋愛ではなく、男性同士の恋愛に惹かれるのだろうか？」という疑問を抱くようになったのです。

この疑問を解明したいと思い、「腐女子」という言葉の発祥地である日本に来て、京都大学で腐女子文化の研究を始めました。文献調査を進める中で、「腐女子」がBL作品を楽しむ理由のひとつとして、そこに性別による差別が存在しないという点に気づきました。現在の中国社会では「男女平等」が掲げられ、少しずつ実現に向かってはいえ、古くから根付いた男尊女卑の社会規範は容易に消えるものではなく、人々の意識や行動に今なお影響を与え続けています。

そのような背景の中で、男性同士の恋愛を描くBL作品は、性別にとらわれることなく、男尊女卑的な価値観から解放された形で物語を楽しむことができます。また、日本と中国の先行研究を比較検討する中で、中国の腐女子はBL作品の「受け」キャラクターに感情移入しやすいのに対し、日本の腐女子は「神の視点」から物語を見守る傾向があるという指摘にも興味を持ちました。

今後は、腐女子を対象にインタビュー調査を行い、彼女たちが理想とする女性像や、彼女たちの中にあるジェンダー秩序を明らかにすることで、中国におけるフェミニズム研究に多様性と新たな視点をもたらしていきたいと考えています。

附属臨床教育実践研究センターから

臨床教育実践研究センターの活動

附属臨床教育実践研究センター長
松下 姫歌



附属臨床教育実践研究センターは、70余年の歴史をもつ心理教育相談室の活動を基盤とし、国内外の大学や専門機関と連携し、リカレント教育講座や公開講座、大学院科目の開講、当センターと相談室の2つの機関誌の発刊等を通じて、現代の心理社会的問題に対する実践および教育・研究の推進を目的に活動しています。

今年度はリカレント教育講座「『心の教育』を考えるー発達障害と情緒ー」を8月3日に開講します。発達障害の理解や対応については多くの知見が積み重ねられてきていますが、今回は、さらに理解を深めるべく、従来取りあげられてこなかった「情緒」という切り口から光を当てます。午前のシンポジウムでは、発達障害をめぐる問題に造詣の深い、奈良県立医科大学教授・児童精神科医の岡田俊先生と、天理大学教授の高嶋雄介先生にご講演頂きます。午後の分科会では、全国の教育現場における多様な心の問題に関する事例研究を行います。講師は客員准教授の青木紀久代先生と村井雅美先生、臨床心理学講座の梅村准教授、当センターの松下が務めます。年度末

には、台湾の精神科医でユング派心理療法家の鄧惠文(タンフイウェン)先生を外国人客員教授として招聘し、公開講座を開催予定です。リカレント教育講座や公開講座は、毎年全国各地から多くのご参加を頂き、心の問題に関する日々の取り組みに役立つと大変好評を得ております。教育学研究科HPでも案内しておりますので、是非、お誘いあわせのうえ、御参加頂ければ幸いです。

なお、当センター・相談室は、2011年の東日本大震災に際し「こころの支援室」を開設し、現地での支援のほか、関西に避難・移住した親子等を対象に様々な心理的支援を提供して参りました。2020年度以降はコロナ禍に加え、震災後10年以上を経て、個々の利用者様の状況変化を受け、一定の役割を終えたと判断し、2024年度を以て閉室しました。利用者様の益々の御健勝をお祈り申し上げるとともに、当事業にご協力下さった、理学研究科附属天文台様や農学研究科附属農場様をはじめ多くの皆様に心より御礼申し上げます。

教育実践コラボレーション・センターから

「『生きる』教育」プロジェクト 始動!

教育実践コラボレーション・センター長
西岡 加名恵

教育実践コラボレーション・センターでは、2024年8月より、SMBC京大スタジオの共同事業「貧困・格差・虐待の連鎖を乗り越える教育アプローチの研究開発と普及」(通称、「『生きる』教育」プロジェクト)に取り組んでいます。「『生きる』教育」とは、子どもたちが直面する「人生の困難」を解決するために必要な知識を習得し、友だちと真剣に話し合うことで安全な価値観を育むことをめざす教育です。子どもたちにとって一番身近であり、トラウマになりうるテーマをも授業の舞台にのせ、社会問題として捉えなおすとともに、授業の力で子どもたち相互にエンパワメントを生み出し、個のレジリエンスへつなげることがめざされています。

「『生きる』教育」は、当初、大阪市立生野南小学校(現在の田島南小中一貫校)で独自に開発されました。当校の約1割の子どもたちは児童養護施設から通っており、トラウマやアタッチメント形成不全の問題を抱えていました。そこで、当校の教師たちが臨床心理学や社会福祉などの知見を学んで開発され

たのが「『生きる』教育」です。現在、田島南小中一貫校で実践されているプログラムには、虐待予防教育(安心・安全・清潔、育児体験、デートDVに関する教育など)や治療的教育(ライフストーリーワーク、子どもの権利に関する教育、キャリア教育など)等が含まれています(「『生きる』教育」で変わる未来」日本標準、2025年参照)。

本プロジェクトでは、「『生きる』教育」を普及するため研修会を提供するとともに、教材・教具をウェブページ上で提供していきます。また、教育方法学、臨床心理学、教育認知心理学、教育社会学、生涯教育学、比較教育学の教員が連携し、子どもの貧困問題に関する基礎研究や性教育プログラムの開発などにも取り組んでいきます。詳細については、下記のウェブページにて発信しておりますので、ご注目いただけますと幸いです。



<https://smbckustudio.iac.kyoto-u.ac.jp/project/project01/>



<https://e-forum.educ.kyoto-u.ac.jp/ikiru/>

グローバル教育展開オフィスから

多様な活動・支援の実施と 成果発信の強化

グローバル教育展開オフィス長
南部 広孝



グローバル教育展開オフィスでは2024年度、前号で紹介したように『<日本型教育>再考—学びの文化の国際展開は可能か』(京都大学学術出版会)を刊行したほか、例年と同じく、大学院学生の国際学会での発表や論文校閲に対する支援、グローバル教育科目の提供などを行いました。また、教員の国際交流活動に対する支援を新たに始め、4件の活動に対して支援を行いました。部局間交流協定を締結している大学や研究機関との交流をはじめ本研究科における国際交流事業への支援も実施しています。このように、研究科の教育研究の国際的な展開がいつそう進むよう多方面での支援を実施しました。このうち、国際学会で発表した学生の経験や、教員の国際交流活動、海外機関との国際交流事業の成果などについては、オフィスのウェブサイト(<https://global.educ.kyoto-u.ac.jp/>)に報告を掲載する仕組みを整えました。ご関心のある方はぜひご覧ください。

2024年度後半にはまた、大学院教育支援機構より令和6年度次世代研究者挑戦的研究プログラムの支援を受け

て、キャリア開発・育成支援講演会を開催し、ソウル大学校師範大学・韓国教育機関訪問活動を行いました。前者については、国内外の大学や高等学校・企業等、多様な分野で活躍されている方を講師として計4回実施しました。このご講演の内容も、オフィスのウェブサイトで動画を公開しています。後者の活動では、ソウル大学校師範大学で大学院学生の研究発表会を開催するとともに、ソウル市内の教育機関を訪問して韓国の社会、文化、教育について理解を深めました。このほか、2024年度までのオフィスの活動をまとめた活動報告書を作成しました。これもウェブサイトで閲覧できるようになっています。

本オフィスは今年度も引き続き、多様な事業や支援を推進するとともに、ウェブサイトの充実も含め、活動の成果を積極的に発信していくことに取り組んでまいります。変わらぬご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。



事務室から

今、教育学研究科

総務掛長
八代 幸造

2024年の10月に、総合生存学館から教育学研究科の総務に配属されてから、早いもので半年ほどが経過しました。

同じ総務・庶務業務とはいえ、配属当初は、教育学研究科特有の業務の進行・方法や専門的な言葉に戸惑いを覚えることもありましたが、執行部の先生方はじめ多くの教員の皆様、事務長をはじめとした事務の皆様に助けていただきながら日々を過ごしました。その過程で、教育学という学問の豊かさや深さに触れることができ、自身の視野を広げることができました。

また、人生が始まって数十年の月日が流れ、先を見るだけでなく後ろも振り返ることも多くなる年齢を迎えたこの時期に、「人の学び」を主軸とする教育学研究科へ配属されたその意味合いについても考えさせられることがありました。

人生の中で得られる最も貴重な学びは、経験を通じて得

られるものであるとするならば、畢竟、人生における学びとは「生きる」という行為そのものであると思います。学びは私たちの人生を豊かにし、意味のあるものにします。それは、自己実現のための手段であるとともに、人や社会に貢献する力を育む土壌でもあります。学びというものがあるからこそ、過去の挫折を乗り越え、そして新しい目標を見つけ、困難に立ち向かい、未来を切り拓くことができるのでしよう。

未来を形作る重要な要素である「学び」、この領域が進展することで、個人の成長、社会の発展、そしてより良い世界の実現が期待されるところです。その最先端の現場である教育学研究科の中に身を置くことのできる光栄を噛みしめ、自分自身もまたさらなる成長を目指して日々精進していきたいと思っています。

Sin Yi Cheung教授講演会についての報告

教育社会学講座 准教授
藤間 公太

2024年12月18日、Cardiff大学のSin Yi Cheung先生をお招きした講演会を、「第58回『知的コラボ』の会」として開催しました。Sin Yi先生は社会階層論をご専門とされており、個人がおかれた状況によって社会的不平等のあらわれ方がどのように異なるのかに関心を持たれてご研究をされています。2020年には、「THE DEATH OF HUMAN CAPITAL?」と題した共著を出版されています。

“ETHNIC INEQUALITY IN EDUCATIONAL OUTCOMES OF CHILDREN IN SOCIAL CARE IN WALES: USING LINKED ADMINISTRATIVE DATA”と題した今回のご講演では、ウェールズにおいてChildren Receiving Care and Support (CRCS) と呼ばれる社会的養育サービスを受けているエスニック/宗教的マイノリティの子どもたちが経験する、教育達成や保健サービス利用をめぐる不平等についてお話いただきました。

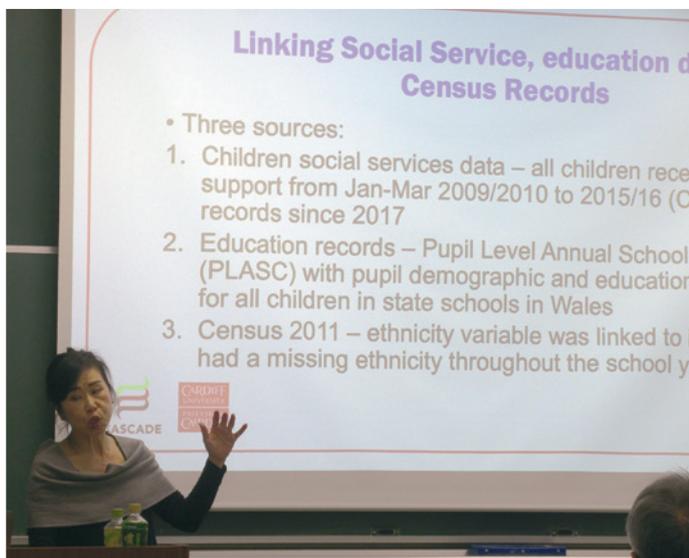
3つの行政データをリンクしたデータを用いた分析の結果からは、(1) 社会的養育サービスの介入はエスニック・マイノリティの子どもには低い効果しか持たない可

能性があること、(2) 一方で、児童福祉システムにおいて、黒人やその他のエスニシティの子どもは、学業成績が良くても選択的に社会的養育に措置、委託されている可能性あることが示唆されました。

社会的養育を受けた者が経験する教育達成の困難や貧困リスクについて、エビデンスにもとづき対策を考えることは日本でも急務となっていますが、行政データに研究者がアクセスするハードルが高く、なかなかそうした取り組みは進んでいません。そうしたこともあり、複数の行政データをリンクした結果、非常に高い社会的意義を持つ研究結果が得られていることに、参加者は大変刺激を受けていました。質疑も活発に行われ、充実した会となりました。

なお、Sin Yi先生たちのこのご研究を発展させたワーキングペーパーが刊行されています (https://osf.io/preprints/socarxiv/cwyr7_v1)。

ご関心のある方は、是非ご一読ください。



若手研究者出版助成事業

教育学研究科では、京都大学人と社会の未来研究院若手出版助成を受け、優秀な若手研究者による博士論文の出版助成事業を行っております。本制度を利用して昨年度は4件採択されましたので、ご紹介します。



学習評価論における質的判断アプローチの展開 —ロイス・サドラー学識の解剖と再構成—

【京都大学学術出版会】

石田 智敬 京都大学大学院教育学研究科博士後期課程修了(2023.3)/愛知県立芸術大学音楽学部・准教授

単純に正誤で評価できない学習成果はどのように評価できるのか。学びの敵ではなく味方となるような評価はどう構想できるか。以上の問いに応える形で、ロイス・サドラーは、1980年代に「スタンダード準拠評価」や「形成的アセスメント」といった考え方を理論化し、現代の学習評価論を基礎づけた。ところがしかし、サドラーはのちに、これらの考え方に対して根本的かつ徹底的な批判を展開するようになった。なぜサドラーは主張を転回したのか。自己批判にも映る、このようなパラドキシカルな立場性は何を意味するのか。本書は、これまで看過されてきた、現代の学習評価論の提唱者であり批判者でもあるというパラドキシカルな立場性を念頭に、ダイナミックに展開するサドラー学識の解剖と再構成に挑戦することで、次代の学習評価論を展望する。プレ・ルーブリックからポスト・ルーブリックへ。本書は、現代学習評価論の理論的支柱であるサドラーの提唱と批判という刺激的な展開を読み解くことで、学習評価の新篇章を提示する。



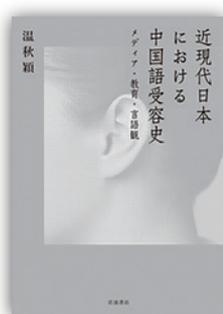
労働学校における生の充溢 生涯教育の空間論序説

【東信堂】

奥村 旅人 京都大学大学院教育学研究科博士後期課程修了(2023.3)/京都大学大学院教育学研究科講師

雇用されて働く人々の生にとって、教育という営みや教育空間の存在はどのような意味を持つのか—本書ではこうした問いについて、「労働学校」という学校教育システム外の教育空間や、そこで学んだ/教えた人々を研究対象として考えました。具体的には、京都労働学校(1957-現在)を取り上げ、その70年近くにわたる教育活動の全体像を示すとともに、元「学生」へのインタビューと「通学」当時書いた文章とを見比べながら、京都労働学校の教育活動がそこで学んだ人々にとって有していた主観的な意味についても検討しています。

学校を卒業した後、多くの人は何らかの労働に就きます。そのような人々が学ぶということの意味について関心がある方は是非ご笑読いただき、地に足のつかない本書の議論を批判的に検討していただけますと幸いです。

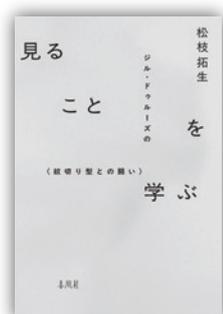


近現代日本における中国語受容史 —メディア・教育・言語観—

【岩波書店】

温 秋穎 京都大学大学院教育学研究科博士後期課程修了(2024.3)/京都大学人文科学研究所・特定助教

中国語は日本人にとって外国語のはずであるが、近代における入り組んだ日中関係ゆえに、そして漢字を使って表記される性格ゆえに、その言語の「他者性」は常に曖昧かつ複雑なものであった。本書は、外国語としての中国語が近現代日本でいかに受容されてきたのかという課題を、文化史の手法で解明するものである。具体的には、1930年代から1960年代にかけて、ラジオや出版物といったメディアを介した日本国内の中国語学習の場において、中国語という外国語を「教養語」として追求した教育者と学習者の言動を考察し、これらの言動と思考の連鎖が当時の日本の中国認識、日中交渉にもたらした意味を検討した。



見ることを学ぶ ジル・ドゥルーズの〈紋切り型との闘い〉

【春風社】

松枝 拓生 京都大学大学院教育学研究科博士後期課程修了(2022.3)/大阪大学大学院人間科学研究科 助教

私たちは、身近にあふれる常套句や紋切り型のおかげで、世界の共通理解を得ている一方で、それらが足枷となって物事の機微を捉え損ねていることも多々あります。たとえば画家ポール・セザンヌが、常套表現を用いずに—ありきたりのイメージにとらわれずに—「りんご」そのものの姿に迫り、それを描ききろうとしたことは有名です。

フランスの哲学者ジル・ドゥルーズは、そうした足枷への抵抗を「紋切り型との闘い」と表現しています。本書はその闘いのうちに、「見ることを学ぶ」という学習思想を見いだしていく思想研究です。自らが囚われている世界理解の枠組みから、いかに自由になりうるのか。ドゥルーズ哲学研究としてのスタイルを取りつつも、人が一生涯かけて追求するほかないであろう、「闘い」と学習のプロセスについて思索しています。

主な出来事 (2024.11.1~2025.3.31)

2024年11月3日(日)	<p>教育学研究科附属臨床教育実践研究センター主催 公開講座 「文化と無意識 —精神分析は現代を生きる私たちにどのように役立つのだろうか—」 松下 姫歌教授 キャンパスプラザ京都</p>
11月8日(金)	<p>高大連携事業 膳所高等学校生徒向け公開講座(後期) 総合・人間科学Bコース 「多様性を理解するための個人差の教育心理学」 高橋 雄介准教授 京都大学総合研究2号館</p>
11月29日(金)	<p>高大連携事業 膳所高等学校生徒向け特別授業「図書館の歴史と多様性」 福井 佑介准教授 京都大学総合研究2号館</p>
12月5日(木)	<p>グローバル教育展開オフィス キャリア開発・育成支援講演会「第一回 海外の大学・研究機関で働く」 講師: 増田 貴彦氏(カナダ アルバータ大学心理学部・教授) 京都大学総合研究2号館</p>
12月7日(土)、8日(日)	<p>シンポジウム「万博学/Expo-logy」～「万国博覧会の戦後世界史」に向けて 佐野 真由子教授 グランフロント大阪北館タワーC</p>
12月11日(水)	<p>教育実践コラボレーション・センター E.FORUM 第3回「『生きる』教育」研修会 「虐待が子どもの自己(self)に与える影響の理解と支援」 西澤 哲氏(山梨県立大学大学院人間福祉学研究科・特任教授) オンライン</p>
12月22日(日)	<p>高大連携事業 「高大連携フォーラムin京都大学」 西岡 加名恵教授 京都大学人間・環境学研究科棟</p>
2025年1月7日(火)	<p>グローバル教育展開オフィス キャリア開発・育成支援講演会「第二回 企業で働く」 講師: 栢田 恵氏(三菱 UFJリサーチ&コンサルティング株式会社政策研究事業本部・研究員) 京都大学総合研究2号館</p>
1月20日(月)～24日(金)	<p>グローバル教育展開オフィス ソウル大学校師範大学教育学科との交流及び韓国の教育機関での視察 ソウル大学校及びソウル市内</p>
1月31日(金)	<p>グローバル教育展開オフィス キャリア開発・育成支援講演会「第三回 高等学校で働く」 講師: 飯澤 功氏(京都市立堀川高等学校・副校長) 京都大学総合研究2号館</p>
2月6日(木)	<p>グローバル教育展開オフィス キャリア開発・育成支援講演会「第四回 大学内の研究組織で働く」 講師: 松本 万里子氏・横江 智哉氏(京都大学総合研究推進本部・リサーチ アドミニストレーター) 京都大学総合研究2号館</p>
2月7日(金)	<p>自主講座「認識台湾 Renshi Taiwan」 台湾映画『無言の丘』上映会&アフタートーク 駒込 武教授 京都大学総合研究4号館</p>

2月14日(金)	グローバル教育展開オフィス 公開講座 第一回「未来を築く多文化教育ー共生する社会のためにー」 講師：パク ジュナ講師、ブラザーフッド・トーマス講師、工藤 和宏氏(獨協大学・准教授) 京都大学教育学部本館
3月5日(水)	グローバル教育展開オフィス 世界市民教育プロジェクト 講演会「Photographing and Filmmaking: Integrating Art Practice into Global Citizenship Education」 講師：原 紘子氏(熊本県立大学・准教授) 京都大学教育学部本館
3月14日(金)	グローバル教育展開オフィス ドルトムント工科大学教育・心理学部との研究ワークショップ 「Sustainability in the Light of (Human) Nature Paths towards World Citizenship Education」 ドルトムント工科大学教育・心理学部+オンライン
3月22日(土)	教育実践コラボレーション・センター E.FORUM 第4回「『生きる』教育」研修会 才村 眞理氏(元 帝塚山大学心理福祉学部・教授) 別所 美佐子氏(大阪市立田島南小学校・主務教諭) 田中 梓氏(大阪市立田島中学校・指導養護教諭) 京都大学総合研究8号館
2025年3月23日(日)	2024年度E.FORUM全国スクールリーダー育成研修「第20回実践交流会」 公開シンポジウム「デジタル社会における多様性が尊重された学び」 松下 佳代教授、石井 英真准教授、久富 望助教、木村 裕氏(花園大学文学部・教授)他 京都大学総合研究2号館 総合研究8号館

教員寄贈図書 2024(令和6)年度

寄贈者氏名	寄贈図書名	出版社	出版年
奥村 旅人	労働学校における生の充溢：生涯教育の空間論序説	東信堂	2024
駒込 武	統治される大学：知の囲い込みと民主主義の解体	地平社	2024
駒込 武	台湾と沖縄 帝国の狭間からの問い：「台湾有事」論の地平を越えて	みすず書房	2024
佐野 真由子	Japanese ceremonial for Western diplomats attending Shogunal castle audiences, 1857-1867	Amsterdam University Press	2024
高橋 靖恵	心理臨床実践において「伝える」こと：セラピストのこころの涵養	福村出版	2024
高橋 靖恵	心理臨床に生きるスーパーヴィジョン：その発展と実践	日本評論社	2024
高橋 靖恵	ロールシャッハ法解説：名古屋大学式技法	金子書房	2018
田中 康裕	心理療法において何が癒やすのか？	創元社	2024
南部 広孝	<日本型教育>再考：学びの文化の国際展開は可能か	京都大学学術出版会	2024
松下 佳代	ミネルバ大学の設計書	東信堂	2024
松下 佳代	測りすぎの時代の学習評価論	勁草書房	2025

受入期間：2024/4/1～2025/3/31 寄贈者氏名順(敬称略)
教育学研究科・教育学部図書室にいただいた寄贈者の著作・分担執筆・翻訳・監修・監訳のみ掲載です。
今後とも蔵書充実のためにご寄贈くださいますようお願いいたします。

入試結果 2025(令和7)年度

教育学部

日程等		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
一般選抜入試 前期日程	文系	46	138	134	46	56
	理系	10	42	33	10	
特色入試		6	19	19	4	4
学士入学(第3年次編入学)		10	23	23	6	6

※前期日程の募集人員は、特色入試において最終的な入学手続者数が募集人員に満たない場合には、残余の募集人員を加えます。

教育学研究科

課程等		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	
教育学環専攻	修士課程	研究者養成プログラム	37	59(11)	59(11)	29(5)	28(5)
		アカデミック・リカレント教育プログラム	5	6	6	2	1
	博士後期課程	研究者養成プログラム	若干名	9(1)	9(1)	1(1)	1(1)
		臨床実践指導者養成プログラム	4	6	6	2	2

※博士後期課程(研究者養成プログラム)は内部進学者を除いた数。

()内の数は外国人留学生で内数

学位授与件数 2024(令和6)年度

学位名等		授与者数
学士	教育科学科	65
修士	教育学環専攻	40
博士	課程博士	21
	論文博士	6

教育職員免許状取得状況 2024(令和6)年度

中学校教諭専修免許状	0
中学校教諭1種免許状	4
高等学校教諭専修免許状	0
高等学校教諭1種免許状	8
特別支援学校教諭1種免許状	0

外部資金受入れ(2024.10.1~2025.3.31)

受託研究

研究題目	委託者	研究担当者
教育コンテンツ・評価手法と探求指導力育成研修の開発	国立研究開発法人 科学技術振興機構	松下 佳代
保育士の親性発達に関する実証的研究	公益社団法人 全国私立保育連盟	田中 友香理

科学研究費補助金 2025(令和7)年度

事業名	研究課題名	氏名
基盤研究(S)	個別的育児支援手法の創出を導く養育者一乳児の動態とその多様性創発原理の解明	明和 政子
基盤研究(B)	概念ベースのカリキュラムを通じた日本型学校教育の再構築	石井 英真
基盤研究(B)	幼児の満足遅延は何に由来し何を予測するのか：縦断コホート研究	齊藤 智
基盤研究(B)	環境感受性の考え方に基づく心理的健康に関する遺伝・環境交互作用モデルの多角的検証	高橋 雄介
基盤研究(B)	「中年文化」の戦後メディア史に関する歴史社会学的研究	福岡 良明
基盤研究(B)	SNSカウンセリング相談員養成プログラムの開発	畑中 千紘
基盤研究(B)	子どもの多様なニーズに対応するパフォーマンス評価を活かしたカリキュラム改善	西岡 加名恵
基盤研究(B)	若年者の犯罪・非行からの離脱プロセス：レジスタンスを促す/妨げる社会的要因の探求	岡邊 健
基盤研究(B)	日本植民地統治下台湾における教育の「植民地性」再考—共時的・通時的比較分析	駒込 武
基盤研究(B)	大学教授職の役割分化の実態と論点の整理：日豪の教育担当教員を事例に	佐藤 万知
基盤研究(B)	領域横断的な万国博覧会史研究を通じた新しい戦後史叙述の可能性	佐野 真由子
基盤研究(B)	コンピテンシーの形成・評価の検討—統合性・分野固有性・エージェンシーに着目して—	松下 佳代
基盤研究(C)	児童相談所におけるネグレクト判定の論理に関する社会学的研究	藤間 公太
基盤研究(C)	東アジアにおける高等教育システムの構造変容に関する比較研究	南部 広孝
基盤研究(C)	行為の概念性から迫る実践知の特質：「実践のなかの省察」とはいかなることか	三澤 紘一郎
基盤研究(C)	東アジアにおける文化差の調査：日本人と韓国人の心理的メカニズムの比較研究	Park Jooha
基盤研究(C)	コミュニティの図書館を目指すソーシャル・ライブラリー：歴史像の再生と再構築	川崎 良明
基盤研究(C)	通学制大学と通信制大学の比較を通じた高等教育の役割とその教育手段の明確化	田口 真奈
基盤研究(C)	明治期中学校形成史の再検討—「辺境」の視点・鳥瞰的視角から—	田中 智子
基盤研究(C)	公立図書館集会所の理念と現実の確執に関する歴史と現状の分析	川崎 良孝
基盤研究(C)	都市新中間層家庭の人間形成と教育戦略：大正・昭和初期の児童文学の分析を中心に	竹内 里欧
基盤研究(C)	近世医療情報の教育メディア史—「不安」に挑む「施印」	VAN STEENPAAL Niels
基盤研究(C)	教育的関係における信頼の理論と実践に関する研究	広瀬 悠三
基盤研究(C)	本邦におけるスーパーヴィジョンの成り立ち—精神分析史からのアプローチ	西 見奈子
基盤研究(C)	自閉スペクトラム特性の強みを探る	明地 洋典
基盤研究(C)	人を全体的にとらえるとは：アメリカ哲学の文脈の全体性をめぐる国際的教育研究	齋藤 直子
挑戦的研究(萌芽)	教育実践の質的研究を通じた日本型大学教育の探求	佐藤 万知
国際共同研究強化(B)	いかにして国際社会で使える英語を身につけるか：スピーキング力と意欲の向上を端緒に	Manalo Emmanuel
国際共同研究強化(海外)	心の働きを制御する心の働きを探る国際共同研究：社会構成主義的心理科学アプローチ	齊藤 智
若手研究	中学生における創造性の発達を促す諸要因の縦断的研究	澤田 和輝
若手研究	乳児期の感覚過敏と階層変分ベイズ推定法を用いた事象関連電位の関連性	神谷 千織
若手研究	Higher education and migrant flows : Japanese universities as migration intermediaries	BROTHERHOOD Thomas
若手研究	オランダのオルタナティブスクールにおける教師の指導性	奥村 好美
若手研究	知識人と労働者による教育空間の形成と展開 —京都労働学校の戦後史—	奥村 旅人
若手研究	学士課程段階の高等職業教育の社会的受容状況に関する実証的研究—中国を事例にして—	張 潔麗
若手研究	童話『ピノキオ』をめぐる差別図書問題と図書館の対応に関する総合的研究	福井 佑介
研究活動スタート支援	「畏敬の念」を生起する芸術鑑賞プロセスの解明	澤田 和輝
研究活動スタート支援	自然言語処理を用いた心理学的構成概念の通時的変遷の検討	西山 慧

人事異動 (2024.11.1~2025.4.30)

2024 (令和6) 年11月1日

澤田 和輝 特定助教 (教育認知心理学) 採用
 西山 慧 助教 教育認知心理学から研究科付 (情報担当) へ配置換

2025 (令和7) 年1月16日

技術補佐員 (教育・人間科学) 採用

2025 (令和7) 年3月31日

楠見 孝 教授 (教育認知心理学) 定年退職
 高橋 靖恵 教授 (臨床心理学) 定年退職
 野村 理朗 准教授 (教育認知心理学) 退職
 久富 望 助教 (情報担当) 任期満了
 藤村 達也 助教 (研究科付) 任期満了
 水野 鮎子 特定助教 (臨床心理学) 任期満了
 黒田 真由美 特定助教 (SIP) 任期満了
 石田 智敬 研究員 (教育・人間科学) 任期満了
 菊池 由葵子 研究員 (教育・人間科学) 任期満了
 杉本 均 研究員 (地域連携ユニット) 任期満了
 高見 佐知 研究員 (地域連携ユニット) 任期満了
 高見 茂 研究員 (地域連携ユニット) 任期満了
 西川 一二 研究員 (教育認知心理学) 任期満了
 松永 倫子 研究員 (教育・人間科学) 任期満了
 技術補佐員 (教育・人間科学) 任期満了
 技術補佐員 (教育・人間科学) 任期満了
 技術補佐員 (教育・人間科学) 任期満了
 事務補佐員 (教育認知心理学) 任期満了
 事務補佐員 (教育・人間科学) 任期満了
 事務補佐員 (総務掛) 任期満了
 事務補佐員 (総務掛) 任期満了
 派遣職員 (教務掛) 任期満了
 派遣職員 (教職教務掛) 任期満了

2025 (令和7) 年4月1日

齊藤 智 教授 研究科長・学部長 (任期2025.4.1-2026.3.31)
 南部 広孝 教授 副研究科長 (任期2025.4.1-2026.3.31)
 西岡 加名恵 教授 副研究科長 (任期2025.4.1-2026.3.31)
 松下 姫歌 教授 附属臨床教育実践研究センター長 (任期2025.4.1-2027.3.31)
 田中 智子 教授 現代教育基礎学系長 (任期2025.4.1-2026.3.31)
 田中 康裕 教授 教育心理学系長 (任期2025.4.1-2026.4.1)
 佐野 真由子 教授 相関システム論系長 (任期2025.4.1-2026.3.31)
 福岡 良明 教授 (教育社会学) 採用
 松永 倫子 特定講師 (教育・人間科学) 採用
 村上 千理 特定助教 (附属臨床教育実践研究センター) 採用
 馮 可欣 特定助教 (教育研究関連) 採用
 齋藤 堯仁 特定助教 (教育・人間科学) 採用
 黒田 真由美 研究員 (教育・人間科学) 採用
 河野 真子 研究員 (教育・人間科学) 採用
 特定職員 (教育・人間科学) 採用
 技術補佐員 (教育・人間科学) 採用
 技術補佐員 (教育・人間科学) 採用
 支援職員 (総務掛) 採用
 支援職員 (総務掛) 採用
 支援職員 (教務掛) 採用
 支援職員 (教職教務掛) 採用

新任教員・事務職員紹介



福間 良明 教授
所属：教育社会学講座
専門：歴史社会学

大学卒業後、10年ほど出版社に勤務ののち、研究の世界に入りました。「戦争の記憶」や「格差と教養」の戦後史について研究しています。



松永 倫子 特定講師
所属：教育・人間科学講座
専門：発達科学

養育者の親性発達や乳幼児の情動認知発達について神経生理学の観点から研究しています。研究も教育活動も邁進できれば幸いです。よろしくお願いいたします。



馮 可欣 特定助教
所属：教育研究関連
専門：教育社会学・ジェンダー

少女期から成人期への移行とそのジェンダー秩序について研究を進めております。研究科に貢献できるよう頑張ります。よろしくお願いいたします。



村上 千理 特定助教
所属：臨床教育実践研究センター
専門：臨床心理学、心理療法

人が人に支えられる体験に関心を持ち、実践と研究を行っています。お世話になった本研究科のために尽力いたします。よろしくお願いいたします。

澤田 和輝 特定助教
所属：教育認知心理学講座
専門：教育心理学、認知科学

人の創造性や美的感性の発達過程の研究をしています。微力ながら、本研究科に貢献できるよう努めて参ります。よろしくお願いいたします。

齋藤 堯仁 特定助教
所属：教育・人間科学講座
専門：犯罪社会学

犯罪行動の原因に関して、統計手法を用いた理論の検証により研究しています。お世話になった本研究科へ貢献できるよう精進します。よろしくお願いいたします。

支援職員 総務掛

4月より総務掛・支援職員としてお世話になっております。今後もより本研究科に貢献できるよう努めてまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

支援職員 総務掛

新たな気持ちで業務に真摯に向き合い、これまでの経験を活かせるよう尽力いたします。どうぞよろしくお願いいたします。

支援職員 教務掛

4月からお世話になっております。至らない点が多々あるかと思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。

支援職員 教職教務掛

教職教務掛で証明書の発行を主に担当しております。日々、懸命に取り組んで参りたいと思いますのでどうぞよろしくお願いいたします。

教育学研究科・教育学部基金

ご寄附いただきました方々への感謝の意を含め、ここにご芳名を掲載させていただきます。
(公開をご希望されない方については、掲載していません。)

戸村 翔一 長崎 徹真 森 信樹

※50音順 ※2025年4月末現在

ー現場に活かせる「理論と実践の往還型の教育・研究」を推進し、 未来の教育の創造と、それを担う人材を育成します。ー

教育学研究科・教育学部は、1949(昭和24)年の創設以来、教育学研究の推進と研究者の養成に加え、全学の教職教育を担いながら、数多くの卓越した人材の輩出と、研究成果の現場への還元によって社会の要請に応じてきました。

学校はもとより、地域、家庭、職場などあらゆる場が「人間形成」の場であり、探究の対象です。本研究科・学部では、不登校・学習意欲不振生徒のための学校改善、過疎地域への地域振興提言などを行うほか、全国の教育現場の第一線で働く人々に研修の機会を提供してきました。こうした社会と連携した教育研究活動は、学生にとって、現場のリアルな問題に触れて自らの関心を見つけ、課題解決への手法を考察する実践の場ともなっています。今後も社会と連携した実践教育を行うため、安定した財政基盤として設立したのが教育学研究科・教育学部基金です。

2021(令和3)年度には、教育学研究科・教育学部基金のご支援によって、ホームページを大幅に刷新させていただきました。このリニューアルは、教育学環専攻1専攻への改組とその意図を明確に反映し、「理論と実践の往還型」の教育・研究を

より一層力強く推進するため、研究科・学部の活動の発信媒体としてのホームページの再構築を目的として行われました。2022(令和4)年度には、基金からの支出は行わない方法でコンテンツを充実させ、ホームページを洗練してまいりました。今後、引き続き、研究支援と教育支援を充実させるため、本基金を発展的に活用させていただきます。ご支援賜りますようお願い申し上げます。

基金の使途：

項目	具体例
(1) 教育支援	・学生のための図書・教材等の購入 ・学生関係居室の整備・維持管理 ・障害学生等のための学習補助者の雇用 ・学生・院生の海外派遣 など
(2) 研究支援	・研究活動基盤整備の支援 ・研究・学術資料の整備 ・公開講座・講演会等の開催 など
(3) その他事業支援	・京都大学教育学研究科シリーズ本の出版補助 ・修了生・卒業生との連携活動 など

詳細については以下をご覧ください。

<http://www.kikin.kyoto-u.ac.jp/contribution/education/index.html>



編集後記

『ニュースレター』第50号をお届けします。ちょうど10年前、編集後記を書いていたことに気づきました。その時は、新入生を迎えた春のキャンパスのワクワク感について綴っていました。あの時にはコロナ禍のような事態が起こるうとは思いませんでした。人生はそもそも不確実ですが、その程度がより高まっている現在、それは不安な時代であるとともに、ワクワクする時代でもあると思います。時代と向き合いつつ、軸を見失わないようにしたいと思う今日この頃です。(石井英真)

表紙によせて

万博を研究対象とする者にとって、2025年大阪・関西万博が近づく世相は、またとない研究チャンスであると同時に、実社会との関係の仕方を問われるエクササイズの連続でもありました。そうしたなかでの一つの試みとして、万博をめぐる最新の研究成果や、学術的な議論のおもしろさを広く社会に発信したいと考え、2024年12月7・8日、公開シンポジウム〈万博学/Expo-logy ～「万国博覧会の戦後世界史」に向けて～〉を開催しました。(佐野真由子)

京都大学教育学研究科・ 教育学部広報委員会

委員長 明和 政子(教育・人間科学講座)
委員 石井 英真(教育・人間科学講座)

委員 藤間 公太(教育社会学講座)
委員 松下 姫歌(臨床心理学講座)

事務担当

教育学研究科・教育学部総務掛

ホームページ <http://www.educ.kyoto-u.ac.jp>

